全国草原再生ネットワーク

草原がつなぐ、人・自然・文化

ニュースレターvol. 11（*Jul., 2012*）

＜発行＞全国草原再生ネットワーク
http://www.sogen-net.jp/

■全国草原再生ネットワーク総会の報告

◇第 6 回総会が開催されました！

去る 6 月 30 日(土)、東京都港区 TKP ビジネスセンターで第 6 回全国草原再生ネットワーク総会が開催されました。本人出席(8 個人･6 団体)、委任出席(23 個人･2 団体)で総会の成立が確認された後、早速審議に入りました。草原データベース整備事業では 114 箇所の草原の自治体位置情報と火入れ主体、保護主体などの入力が終わり、西日本を網羅したこと、草原文献リスト整備事業では昨年 34 件の文献情報が提供されたことなどが報告されました。また、昨年度できたこと、できなかったことの要因をきちんと捉え、その課題を解決することが本年の事業推進となることを確認しました。本年度のデータベース整備事業は追加項目を検討したうえ、会員アンケートを行い、情報を収集しデータベースへ入れ込んでゆくこと。また、過去のニュースレターについては、直近 1 年分を除きホームページに公開していくこと。現在 8 万ビューを超えるようになったホームページを更に充実するため、会員からの情報を集めやすくする工夫をすること。10 月に予定されている第 9 回草原サミット･シンポジウムには会員がこぞって参加するという最大の支援などが承認されました。

その他の事業としてニュースレターの草原紹介をリレー方式でつないでゆくこと、総会に合わせ、エクスカーションまたは講習会などを開催。会員が参加しやすいように総会は毎年 6 月の最終土･日とする等も満場一致で採択されました。

全国草原再生ネットワークは過去のサミットを経て結成されたといっても過言ではありません。総会出席者から、一般向け事業と、草原を見つめている専門化集団として会員間で論じ解決していかなければならない専門的事業が必要である、という意見に深くうなずきました。

第 6 回定期総会の様子

サミット・シンポジウムの状況報告

また、第 9 回全国草原サミット･シンポジウム in みなかみの実行委員会から、現在までの進捗状況、ポスター、セカンドサーキュラーの紹介がありました。サミットには 7～10 市町村の首長を迎える予定で、会員の皆様の活動拠点での更なる支援、根回しが必要と感じました。

閉会後は、「火入れの安全性のために」とお知らせしていたテーマ通り、3 題の報告をいただきました。

一例目は 4 月におこった阿蘇の野焼きボランティアの死亡事故について事故状況・経過報告と、今後に向けた安全対策のまとめを、(公財) 阿蘇グリーンストックの山内専務理事からいただきました。胸が詰まる思いで伺いましたが、野焼きを実施している場所ならどこでも事故の可能性はある話なので、参加者全員、熱心に聞き入っていました。現在、財団で作成中の「野焼きヒヤリハット集」の紹介がありましたが、その全国版をネットワークで作ろうとの話が上がっていました。

二例目は島根県大田市の三瓶山の野焼きの実行体制や消防署や警察などの協力体制について、井上雅仁氏から報告をいただきました。100 個以上も並ぶジェットシューターをボランティアや市職員が背負い、消火作業をしている姿を DVD でみて、各地で異なる安全対策を興味深く学んでいました。

阿蘇グリーンストック山内氏による報告

北広島町白川氏による報告

最後は前回のサミットの開催地、広島県北広島町からです。千町原の野焼きが中止になったときの、ボランティア対応について、白川勝信氏からの報告でした。野焼きは天候に左右されるもの。ボランティアが集まったのに野焼きが中止ということはありがちです。今年の千町原では雪のため中止となりましたが、火入れ地見学会での対応、当日の流れのおさらいなどが行われました。中止の場合にどういう風に対応し、草原ファンを増やしていくことができるか、とても大事な話だと感じました（この事例の詳細は、本号で報告されています)。

3 題とも興味がある話ばかりで、皆さん時間を忘れていつまでも熱っぽく語らっておられました。

（事務局）

■「第９回全国草原サミット・シンポジウム in みなかみ」について

◇サミット・シンポジウムの経過報告

今回は、第 9 回草原サミット・シンポジウムの経過報告をさせていただきます。

5 月は案内チラシとポスターを作成するために、活動報告や分科会、シンポジウムの内容などについて、詳細の内容を決めていきました。活動報告の上ノ原入会の森については、森林塾青水の海老沢さんに、行政との取り組みやスキー場跡地の草原の生物多様性などについて、山梨市の乙女高原ファンクラブの植原さんに、草原の先進的な取り組みについて、阿蘇グリーンストックの山内さんにお願いしました。また、シンポジウムのまとめとサミットでの問題提起について、会長の高橋さんにお願いしました。

分科会は、当初からお願いしていた、生物多様性については日本自然保護協会に、茅の利用については日本茅葺き文化協会に、流域コモンズについては当初予定していたところから変更して、森林塾青水会員の阿部さんが所属している三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティングにお願いしました。また草原と

観光については、団体にお願いすることができなく、コーディネーターをグランドワーク大山蒜山の徳永さんにお願いしました。

6月初旬に案内チラシとポスターが完成し、いよいよ本格的にサミットの参加依頼と参加者募集が始まりました。

6月15日、基調講演をお願いしました養父先生に東京まで来ていただき、基調講演の内容の調整をしました。上ノ原の状況と今回の草原サミットの目的などをお話ししましたが、とても几帳面にメモを取られていて、取材されているみたいでした。

6月30日のネットワークの総会において、みなかみ町の木村さんが都合悪く出席できなかったので、浅川が今回の内容の説明と、サミットの参加について行政への働きかけをお願いしました。

7月11日は、みなかみ町の木村さんと浅川が、みなかみ町周辺の主要な町村に、草原サミットへの参加のお願いに回りました。玉原高原のある沼田市は4月に参加申込みをいただきましたが、住民の参加もお願いしました。世田谷区の健康村や道の駅で有名な川場村は、村長とお話しができその場で参加申し込みをいただきました。尾瀬や武尊高原などがある片品村は、後で参加申し込みがありました。上ノ原の茅が重要文化財の茅葺きに多く使われている中之条町は、町田工業の町田さんと一緒にお願いしました。最後に湯ノ丸高原がある嬬恋村は、笹岡さんに人を紹介してもらい、好意的にお話を聞いていただきました。

今回の訪問は延べ200キロの行程で大変でしたが、新たに2村から参加申し込みをいただき、大変有意義な訪問となりました。あとは利根川の流域と西日本の市町村の参加があるとありがたいので、会員のみなさんには、今後も市町村の参加の働きかけをお願いいたします。

（浅川　潔：森林塾青水）

◇サミット・シンポジウムのチラシが完成しました

サミット･シンポジウムのチラシが完成しました。サブタイトルは､｢川でつながる草原の恵み－流域コモンズで分かち合う、水源地域の豊かな自然とくらし｣です。みなかみ町は、首都圏を流域に持つ利根川の源流域にあたります。藤原地区には、かつて入会の茅場として利用されていた約 11ha のススキ草原が残り、利根川流域の市民団体、地元住民、行政が協働して保全に取り組んでおり、ぴったりのサブタイトルと思われます。関東地方では、はじめてのサミット・シンポジウムとなるため、草原保全の機運が広がる契機になることが期待されます。

上ノ原の様子

【期　日】

2012年10月27日（土）～29日（月）

申込〆切　9月21日

【会　場】

群馬県利根郡みなかみ町藤原　小中学校体育館

【スケジュールと内容】

※詳細は、同封の案内をご覧下さい。

□10月27日（土）

・藤原見学コース

上ノ原入会の森、雲越家住宅（国重要有形民俗文化財）、諏訪神社

・茅刈り体験コース

□10月28日（日）

・基調講演

「里山における人の営みが、生物多様な環境を維持」

養父志乃夫氏（和歌山大学システム工学部環境システム学科教授）

・事例報告

「乙女高原の自然を次の世代に！」

「阿蘇の緑を守る」

「人と生き物が入り合うコモンズ村･ふじわら」

・分科会

「地域の生態系サービスを見える化－マップづくり－」

「草資源（茅）の多面的な利用とこれからの茅葺き」

「流域コモンズによる生物多様性保全と価値評価」
「草原と観光（ニューツーリズム）」
・分科会からの報告とパネルディスカッション
・懇親会
□10 月 29 日（月）
・第 9 回全国草原サミット
草原サミットの趣旨説明
草原シンポジウムからの報告および問題提起
各自治体における取り組み状況
全国草原サミット宣言

2010 年の茅刈りコンテストの様子

□関連のイベント
星の鑑賞会、パネル展示、物産品販売　など

【お問い合わせ・お申し込みは】
みなかみ町役場環境課環境政策グループ
〒379-1393　群馬県利根郡みなかみ町後閑 318 番地
Tel. 0278-25-5003
Fax. 0278-62-2291

（事務局）

雲越家住宅

■各地からの報告

◇公開シンポジウム「阿蘇の草原に生きる植物と土壌―わかってきた植物ごとに好きな土壌ー」の報告

2012 年 6 月 2 日に熊本県阿蘇市で公開シンポジウム「阿蘇の草原に生きる植物と土壌ーわかってきた植物ごとに好きな土壌ー」が開催されました。独立行政法人農業環境技術研究所が中心になって各地の半自然草原で植物と土壌の関係を調べた成果が発表されました。全部で 5 人の演者がしゃべるという長丁場でしたが、とても有意義なシンポジウムになりました。

最初に阿蘇の草原の価値とその危機について講演があったあと、2 人目の講演では日本の土壌と植物の関係について簡単に紹介がありました。日本は雨が多いため土壌は酸性になりやすく、またリン酸が少ないために作物を育てにくいという特徴があります。農業生産の効率を上げるために各地でリン酸肥料と石灰資材を土壌に施用してきたために、農地だけでなく周辺の緑地でも土壌 pH やリン酸の濃度が上がっています。これらは農地周辺の半自然草原に生育する野生植物の生育には影響しないのでしょうか？　最初にこのような問題提起がされました。3 人目の講演では、日本各地での植生調査と土壌の化

シンポジウム会場の様子

学分析の結果から、オミナエシやサワヒヨドリのような半自然草原に典型的な在来種は土壌 pH の低い酸性土壌に多く生育する一方で、セイタカアワダチソウなどの外来種の多くは土壌 pH が高い土壌に多く生育するという報告が行われました。4 人目の講演では植物体中の栄養分についての分析の結果から、オミナエシやサワヒヨドリのような半自然草原に典型的な在来種はセイタカアワダチソウなどの外来種に比べ、植物体中のリンの濃度が低く、特にサワヒヨドリについては、カルシウムやマグネシウム濃度がセイタカアワダチソウに比べ高いという報告がおこなわれました。これら 2 つの講演から、リン酸肥料と石灰資材を施用した pH が高く栄養が豊富な土壌は在来植物の生育には不利で外来植物の侵入を促す可能性が指摘されました。最後の講演では、これらの知見と各地での草原再生に関わる取り組みを合わせて紹介しながら、草刈りや野焼きなどの伝統的な管理が草原の植物の多様性を守るというまとめの講演でした。質疑応答の時間には、阿蘇の土壌特性や外来種の管理から自分の畑の土壌についてまで様々な質問が出てとても盛り上がりました。

演者を交えての意見交換

今回のシンポジウムでの研究成果報告から、土壌と植物は切っても切れない関係にあることがわかりました。これから草原再生を行う地域ではまず土壌の分析を行って、その土地の土壌特性を把握した上で活動を行うと効率的に草原再生ができるかもしれません。

（横川昌史：京都府在住）

◇火のない火入れ

4 月 7 日、広島県北広島町の千町原では 2 年振りの野焼きが実施される予定でした。しかし前日の段階で天気予報は「夜半過ぎに雨」。中止にするという選択もありましたが、色々と考えた上で、実施することにしました。野焼きに関わる各団体にとって、中止にすることによるメリットよりも、(火は着かなくても）実施することによるメリットの方が大きいと考えられたからです。地元もボランティアも消防団も女性会も、作業の予定を入れているので集まることはできます。そのため、実施したことによる「消防団の訓練実施」「八幡の風景を体感」「大勢と食事をしながらの交流」などのメリットに比べて、中止による「思いがけず時間ができる」というのは、魅力の低いものです。

当日の千町原

課題は「来た人に、どのように楽しんで頂くか」ということでした。ボランティアのみなさんは「千町原の草原をなんとかしたい」という思いで来られる方ばかりなので、作業をすることが一番の満足なのでしょうが、防火帯は秋の作業時に既に刈ってあるし、雨で濡れた草には火が着きません。色々と考えた末、午前中には「火入れ地の見学会」、午後には「火入れの訓練」を実施することにしました。作業に来られる方は、普段観察会に来られる方と少し違う人達なので、作業をしている場所の「自然」を、もう少し深く知ってもらいたいと思ったからです。また、午後から「訓練」ということにしておけば、ひょっとしたら少しは火がつくかも知れない、という目論みでした。参加人数は減るかもしれませんが、来た人には何となく楽しく過ごしてもらえそうです

し、訓練は翌年への繋ぎにもなります。「訓練」の連絡をしたことで参加者が減ることも予測されましたが、76 人の事前申込み者のうち、58 人が「参加します」との回答でした。みなさんの意識の高さに頭が下がります。

そうして迎えた当日、なんと雪が積もっていました。これでは、ひょっとしたらどころか、絶対に火は入りません。それでも、本番の通りに受付をして、500 円を頂き、行事を進めます。手短に挨拶を済ませた後は、雪の中を 3 班に分かれて歩きました。案内をするのは NPO 法人西中国山地自然史研究会の講師陣です。こうした急な変更にも対応していただけるのはありがたいし頼もしいことです。

火入れ地の見学会

見学会でみられたカスミサンショウウオ

昼食の様子

午前中の作業終了予定の時刻には、山麓庵に戻り、昼食を頂きました。昼を過ぎても雪が止まず、消防団も訓練を室内に切り替えたという連絡があったので、ボランティアも現地には出ず、室内でシミュレートすることにしました。着火の手順を書いた紙を配り、各班の動きを説明すると、みなさん真剣に聞いて下さいました。説明の後は、草原の管理や火入れについて、色々と質問が出たので、地元の人の思いを聞いたり、そこここで話をしたりとワークショップのような雰囲気になり、いつもの作業ではなかなか出来ないような交流ができました。

火は入らなかったものの、それぞれの「思い」を交わす場を持つことが出来たことで、今後の保全作業にとって大切な一日になったように思います。どこの草原でも、天候不順による火入れ延期は、主催者にとって悩ましいことですが、千町原の場合は、今回のような形で、勉強・交流・意見交換など、活動の目的を変えて実施できるのではないかと思いました。

そうはいっても、来年はやはり火を入れたいものです。

（白川勝信：広島県在住）

■新コーナー「全国草原リレー」

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで、各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第 1 回は、理事でもある国安氏に、長崎県平戸島の草原を紹介して頂きます。今回の執筆者が、次回の執筆者へと原稿をリレーしていきます。執筆の依頼を受けた方は、ご自分のフィールドなどをご紹介下さい。

■西海国立公園平戸島川内峠の草原■

年に１回家内と国内旅行をする事を常としていますが、その旅行の途中で偶然草原に遭遇することがあります。今年は有明海の干潟再訪を目的に5 月下旬に九州北部を回ってきましたが、そのついでに寄った長崎県平戸島で出会った川内峠もその一つです。泊まった民宿の方から展望の良い場所があるので是非寄ってみたらと勧められ、行ってみたところ、毎年２月に火入れを行うことでススキ草原を維持しているとの解説板が設置されておりました。帰ってきて草原データベースを確認したところきちんと掲載されており、感心しました。なお、数年前にその目的に生物多様性の確保が加えられた自然公園法に基づき、タイワンツバメシジミの捕獲禁止看板も設置されておりました。

偶然の出会いといえば、この全国草原再生ネットワークも同じで、今年の総会に横田潤一郎様は草原がきっかけで知り合われたという奥様連れで参加されていました。懇親会での一コマもあわせてご報告します。

お幸せそうな横田夫妻

（国安俊夫：群馬県在住）

■書籍紹介

◇森と草原の歴史－日本の植生景観はどのように移り変わってきたか

著者：小椋純一
出版社：古今書院
￥5,200（税別）
ISBN　978-4-7722-8111-9

本書は、日本の森と草原を中心とした植生景観の変遷を、さまざまな方法により、過去数十年から１万数千年のスパンで考察したものである。その考察には、絵図類、旧版地形図、古写真、文献類をもとにした従来の方法によるものもあるが、新たな試みとして、古木の幹を一定間隔で切ってその成長過程を調べる樹幹解析や土壌や泥炭中に存在する微粒炭を調べる微粒炭分析からの考察も含まれている。

（出版社の紹介文より）

第１部：移り変わる植生景観
第１章：過去 50 年間における植生景観変化
1.1　岡山県北部の中国山地（津山市阿波付近）の場合
1.2　京都市北部郊外（左京区岩倉付近）の場合
1.3　伊勢湾口の離島（神島）の場合
1.4　総　括
第２章：明治～昭和初期の植生景観
2.1　古写真に見る明治～昭和初期の植生景観
2.2　文献類に見る明治期の植生景観
2.3　旧版地形図に見る明治前期の植生景観
2.4　樹幹解析からみた京都近郊の里山の歴史
2.5　明治期における京都府内の植生景観変化の背景
第３章：近世から中世の植生景観－絵図を主要史料として－
3.1　絵図類の利用による植生景観史研究のための方法論
3.2　「華洛一覧図」と「帝都雅景一覧」の考察からみた文化年間における京都近郊山地の植生景観
3.3　「出雲大社并神郷図」に見る鎌倉時代における出雲地方の植生景観
第２部：変化する植生史の常識
第４章：草原の歴史
4.1　日本の草地面積の変遷
4.2　微粒炭分析に見る日本の植生の歴史
第５章：鎮守の森の歴史
5.1　『偵察録』に見る明治前期における関東地方の鎮守の森
5.2　八坂神社境内の植生景観の変遷
5.3　出雲大社境内とその周辺の植生景観の変遷
5.4　過去の神社林の一般的な植生を考える
5.5　むすびと補足

■草原をめぐる動き（2012 年 7 月～10 月）

7/8　遊歩道にお花畑づくり（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台エコミュージアム）
7/14-15　第 4 回 ススキ草原の青刈り＆生き物調べ木馬道フットパス地図づくり（場所：群馬県みなかみ町藤原、連絡先：森林塾青水）
7/5　秋吉台お花畑プロジェクト 1～美しい秋吉台を守ろう～（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台エコミュージアム）
8/4 千町原夏の保全活動（場所：広島県北広島町千町原、連絡先：高原の自然館）
8/5　マルハナバチ調べ隊 2（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
8/18　杭を作ろう（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
8/19　乙女高原を歩こう（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
9/9　マルハナバチ調べ隊 3（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
9/30　草原の復元作業 2～セイタカアワダチソウ駆除作業～（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台草原ふれあいプロジェクト）
10/13　秋吉台お花畑プロジェクト 2（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台草原ふれあいプロジェクト）
10/27-29　全国草原サミット・シンポジウム in みなかみ（場所：群馬県利根郡みなかみ町藤原、連絡先：みなかみ町役場環境課）

※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク　ニュースレター　vol.11　2012 年 7 月号

全国草原再生ネットワーク事務局
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1
NPO 法人緑と水の連絡会議内　Tel. 0854-82-2727　Fax. 0854-84-0262

【編集後記】第 9 回全国草原サミット・シンポジウムのチラシも完成し、いよいよ本格的な準備に入ってきたようです。多くの参加があり、盛況で有意義なサミット・シンポジウムになるように、みなさまのご参加とご協力をお願いします。